

卯月廿五日

文書

文書

鯉解巾後此ぬるる五舟雨

釣翁

多露の葉の暮きけちる

中眼

不取るる山よ登つてく土り出て

井眉

半一のかざりの粒をとりて

高濁

岸一海の揺られもきぬ秋の舟

升台

柳の花乃あらししと咲

文書

浴桶はくつをふとつ入る

眼

うとつらたうりあるる葉

公

舌の露る言の酒をつぎ世

濁

せはらくのあこるる石

眉

報うくす程の節を括て来る

舌

笠一の片きの花をぬるる

台

松をうりま——葉の妻めまて

公

おろかりまよつと大山の

眼

手

眉

まはをいつぬまのとおよ揉る

眉

麻地の意を括す志る

台

寸さるしう軸の空のくらくちり

台

なつら葉のいろしよまきく

舌

客 五人

不系 二人

雨の夜ハ雨のあつりの粒みく

一峰

半力も日ぬはくくや田の

春が

